

テレビにおける「農業・農村」表象とその構築プロセス (3)

——NHK『明るい農村（村の記録）』を事例として——

○静岡文化芸術大学 加藤裕治
東京大学 祐成保志
静岡文化芸術大学 船戸修一
滋賀県立大学 武田俊輔

1 目的

本報告は、NHKの農事番組『明るい農村』の枠内で制作されたテレビ・ドキュメンタリー「村の記録」の制作関係者（ディレクター）への聞き取り調査を実施し、本番組の企画意図や番組制作過程を明らかにすることで、農事番組制作における特徴を指摘する。

2 方法

そもそもNHKの農事番組の制作は、アメリカのそれを模倣する形で組織化された。1949年、全国の放送局に「RFD（ラジオ・ファーム・ディレクター）」と呼ばれる農事番組担当ディレクターが配置され、東京の担当者と共に制作するという体制を取り、1949年には東京で開催された「全国RFD会議」によって正式に発足する。その後「農事部（後に農林水産産業部と改名）」という番組専門の部署として組織化された。さらに、1952年には、各地の農協職員や都道府県の農業改良普及員など約600人を番組に情報を提供する「RFD通信員」として配置し、全国的な情報ネットワークを構築した。こうした通信員によって集められた地域の農業・農村についての情報をもとに農事番組を制作するという独自の体制の中で『明るい農村』も制作されている。本報告では農事番組のこうした独自の特徴が番組に与えた影響を詳細に把握するために、『明るい農村（村の記録）』を制作していた関係者（ディレクターなど）への聞き取り調査を行った。

3 結果

番組が始まった1950年代は、農業の近代化が推進されていた時代であり、それを促進させる有効な媒体として農事番組への期待を制作者側は持っていた。しかし、1960年代からは農業の近代化がもたらした弊害（出稼ぎや農業の機械化など）や農政の矛盾（減反）が農村や農家を疲弊させていった現実を踏まえ、農業・農村問題を描かざるを得なくなった。さらに1970年代からは離農化が進み、国民の半分以上が都市に住む消費者になるにつれ、農業・農村問題を告発するのではなく、都市の消費者に農業や農村を紹介するという「都市と農村を結ぶ」番組制作へと向かうことになった。

4 結論

農業の近代化/民主化の意図を持って制作が開始された番組であったが、次第にその意図と異なる農業・農村の現状と向き合うことになる。このことは通信員と制作者の間関係性の変化を引き起こすことにもなった。それは同時に、『明るい農村』が映し出そうと意図する「農業・農村」という前提を常に揺るがし、変質させる契機にもなっていたといえる。

文献

船戸修一・武田俊輔・祐成保志・矢野晋吾・市田知子・山泰幸, 2012, 「テレビの中の農業・農村 -NHK『明るい農村（村の記録）』を事例として-」『村落社会研究ジャーナル』37, p. 37-47.